

<2023 年 訪英和解の旅>

2023 年夏、アガペワールド日本から 6 名の者が訪英して、FEPOW 関係者との交流の時を持ちました。 その参加者の手記を披露させていただきます。

~~~~~

3 年ぶりの夏季英国訪問

2023 年 8 月

アガペワールド日本代表 小菅啓子

コロナ禍が下火となって、日本からの海外への旅行規制が緩和されたことにより、2 年前（2021 年）に計画していたもののキャンセルになってしまった英国訪問を 2023 年 6 月に再開することができました。

日本からの訪問者は 6 名（田端良恵先生、田口早苗さん、溝淵尚子さん、三宅栄実さん、藤田美代子さん、私）。その内 5 名が全員揃って、6 月 29 日（金）の朝、羽田発のフライトで出発できることを楽しみにしていましたが、前日に、その便がキャンセルになったという連絡が入り、5 名が別々の航空会社の異なるルート・経由地に振り分けられてしまいました。

しかし、正に神様の方法としか言えない絶妙な振り分けにより、渡英経験者とそうでない者の組み合わせ、そして経由地が異なっても現地への到着時間帯がほぼ同じになるという結果に。そのため、到着の翌日に予定されていた、FEPOW 関係者とのアフタヌーンティーとそれに続く日本大使館主催の Reunion Reception（和解の関係者の再会の場）の両方の行事に間に合いました。

それらの行事には、百人を超える方々が参加されるため、その全ての方々と交流を深めることはできませんが、日本からの訪問者には、それぞれ FEPOW 関係者との新しい出会いが備えられていました。

一週間の滞在の後、日本へ帰国した 4 名の参加者を見送った後、私と三宅栄実さんは、更にか月間、現地に滞まって元捕虜の子どもや孫にあたる方々を訪問しました。2024 年 10 月に Pilgrimage（和解と癒しの旅）にて訪日する方々にもお目にかかることができました。

戦争当時捕虜であった方々は、皆さん既に亡くなっていますが、そのご遺族が当時の記録を大切に保管して、今も調査をし、父親あるいは祖父の足跡をたどっています。

かつてアガペの活動を通して、戦時中タイメン鉄道の建設現場において看守であった阿部宏さんとの感動的な和解の再会をしたロン・アプトン（故人）さんという方がいらっしゃいました。今回は彼の娘さんご夫妻に会うことができました。丁度その時、栄実さんのご友人で同じく戦後処理活動の調査研究をなさっているご友人が合流されて、アプトンさんに関するお話しを一緒に伺うことができました。このように、次の時代を担う若い方々が、和解の活動に関心を持ってこの働きに加わってくださることは、私たちの喜びです。

以上

## 2023 年夏 英国和解の旅において得た貴重なお友達

シオン・フルゴスペル・チャーチ（愛媛県西条市）

ヴェロニカ・田端良恵

思えば、過去の不幸な戦争により日本軍の捕虜となり、捕虜収容所での悲惨で呪わしい日々から生還した英国兵士の方々は、恨みと怨念をこめて、そのことを次世代に語り継いできたのです。

その故に日本と日本人を極端に嫌って生きてきた英国人の中に、癒しと和解の福音を持ってゆくようにと、恵子ホームズさんは神さまから特別な使命を与えられ、それに直ちに従い、一人で立ち上がったのです。

今では沢山の同志の方々に支えられて、活動は世界に広がっております。私も今は、その素晴らしい活動の小さな証人とさせていただいております。

2023 年 7 月始めのある日、ホームズ邸に、お交わりと証しのために数名の方が来られました。

その中に、英国育ちの 50 歳位の美しい女性がおられて、その方が私の右隣りに座りました。ここから主の奇跡の歯車はゆっくりと動きはじめたのでした！ そのご婦人はクレア夫人という方です。

クレア夫人に私を紹介する優しい声が聞こえました。「パスター（牧師）タバタ…」その瞬間、クレア夫人がじつと私を見つめて、「おお！」と感動の声を発しました。そして次の瞬間、私の右の手をしっかりと握りしめたまま、ご自分の心の奥にある思いを注ぎ出すかのように話し始めていました。ふと見ると目には涙が光っておりました。その後も、私の両方の手をしっかりと握りしめたままです。私はまだ一言も話していないのに…。

言葉で語り合うその前に、お互いの内におられる御聖霊がすでに交流しておられたのでしよう。

そこで初めて私はクレア夫人に尋ねました。「あなたの一番好きな賛美歌は何ですか？」と。すると直ぐにあの素晴らしいアメイジング・グレイスをハミングし始めたのです。驚きと喜びで、私もすぐにハミングに加わりました。するとそこにいた皆さんも賛美し始め、溝淵尚子さんがフルートを吹いてくださり、部屋中に賛美が満ちあふれたのです。その時の私たちは、まるで天国の入口に立っているかのような輝かしい喜びの中におりました。

その後、日本に帰国して 4 ヶ月経った 2023 年 10 月、主の祝福は私たちを追い続けてくださいました。あのクレア御夫妻が来日し、恵子ホームズさんと訪英グループの皆さまを、東京の我が家にお招きして喜びの同窓会を開くことになったのです。

これら重ねての祝福が、私が牧会している教会の「開拓 20 周年目の年」でありましたことにより、今後の牧会に絶大なるお励ましを賜った現実を、ひれ伏す思いで感謝し、喜びに溢れて主の聖名を讃えております。

以上、主にハレルヤ！

私は主の導きによって、大学の Peace Project のために英国を訪れ、捕虜のご家族にインタビューする機会を得ました。到着初日、ロンドンでの会合で初めて話したのは、Agape World の働きをサポートしている Victoria でした。

彼女は私の研究内容に関心を持ち、他に参加していた方々に、私の研究を話し、協力者を集めてくださいました。それから沢山の道が開け、多くの捕虜や民間人抑留者のご家族を毎日訪問しました。バスや電車を利用してイングランドの様々な場所に行くことは、少し大変でしたがとても楽しい経験でした。インタビューを快く引き受けてくださった方々は皆とても優しく、観光地や記念館に連れて行ってくださったり、ご自身が書いた本など貴重な情報を共有して下さったりしました。

多くの方にインタビューし、一次資料や当時の写真をいただき、捕虜や民間人抑留者としての経験がどれほど苦しいもので、戦後にも深い傷を残した体験だったかを教わりました。日本軍によって引き起こされた戦争被害は予想を超えて大きく、憎しみや痛みがまだ世代を超えて受け継がれていることに胸が痛みました。しかし同時に、日本人と和解をした捕虜のご家族は、癒しをもたらす謝罪と赦しの力、和解を導いてくださる神様のアガペの愛について語ってくださいました。

あるご家族は、憎しみによって自分を「赦せない心の牢屋 (prison of unforgiveness)」に閉じ込めていたと話していました。この感情から抜け出す唯一の方法は相手を赦すことでした。自分に対する神の無限の愛を知って受け入れた時、相手を赦し愛することが可能になったそうです。憎しみは人を縛り付けてしまえますが、愛と赦しの中に本当の解放があります。アガペの愛は、全ての罪を覆い私たちを新しく造り変えるのだ、と改めて実感しました。

帰国後は、インタビューで学んだ歴史や和解の証をまとめ、大学で発表しました。多くの学生や教授が捕虜の歴史に興味を持ち、和解を身近なものとして捉え、自分に何ができるのか考えるようになりました。

捕虜のご家族、Agape World の皆さんとの出会いは、私にとってかけがえのないものになりました。また、若い世代として担うべき和解と平和への使命を強く感じた旅となりました。

夏の学びの中で、「自分が生まれた家に壊れている所があれば、今その家で生きる自分が直すことが必要であろう」という言葉に出会いました。

日本人として修復すべき過去があるならば、今を生きる私たちが、過去と向き合い、歴史を正しく学ぶ必要があります。同時に、私たちは戦争の過ちを振り返り落胆するのではなく、神に与えられた和解の希望を握りしめて生きていくことができます。

アガペの愛を持って活動される Agape World の皆さんの後を追いつつ、私も主により頼みつつ次世代として和解のために働く者になりたいです。旅の始めから道を備えて導き、沢山の出会いと学びで祝福して下さった主に感謝します。

2023 年夏

アフタヌーン・ティーと新しいお友達 2023.6.30(金) 田口早苗

恵子ホームズさんは、日英交流の功績により、エリザベス女王から勲章を頂きました。

彼女が主催する「アガペの会」により6月30日「軍人クラブ」にてアフタヌーン・ティーが開催されました。恵子さんは、私の英語の先生の奥様でしたが、イギリスに行ってから交流が続いていました。古くからの友人です。ご主人のポールホームズさんは、飛行機事故で亡くなっています。会は盛会で多くの方々と交流できました。



↑軍人クラブの建物



軍人クラブ内の階段



↑アフタヌーン・ティーのセット



↑会場のベストスリー母娘



↑私もオシャレして出席



↑恵子さんの長男ダニエル



↑「アガペの会」の方々と記念撮影

17時までの「アフタヌーン・ティー」の後には、近くにある日本大使館開催のレセプションに18時から皆さんと出席しました。

厳重な荷物チェックやボディチェックを経て館内に案内されました。イギリス大使や大使夫人との交流、アレンジされた和風おつまみやドリンク。人々との会話が楽しい一時でした。レセプションには更に多くの方々が集まり盛会でした。20時30分大使館をあとにし、日本から訪英した方々と共に「JCF」(Japanese Christian Fellowship)に泊まりました。以上

## イギリス訪問 — 16年ぶりの再会など 2023年7月 溝淵尚子

2023年6月30日、日本大使館にて16年ぶりにお会いしたLynetteさんは、1987年に外国語指導助手の第1期生として東京の小学校で英語を教えておられた方です。今回の私達のイギリス訪問の後、Lynetteさんは、先の大戦中に彼女のご両親がミャンマーにおいて、日本軍に抑留されていたことを書いた小冊子を送って下さいました。聡明な女性が歴史を綴っていたことを知りました。イギリス人の誠実さと深い愛の心を感じました。戦争という苦しい経験から新しい未来への希望が見える本が生み出されていることに感動し、更にこの国の方々のために働きたいと思われました。



<Lynetteさん>

2007年10月17～18日、デニス・モーレイさん（戦時中日本軍の捕虜として神戸市の工場で働いていた）が、彼の娘デニズさんとひ孫のリオーニを連れて、恵子ホームズさんの案内で我が家に泊りに来て下さいました。その時、恵子さんとイギリス人元捕虜の方々とそのご家族は、尾道市立高見小学校を訪れ、一緒に和太鼓を叩き、お茶室でお茶と和菓子のもてなしを受けました。当時10歳だったリオーニは、日本に行くことをためらっていましたが、英国の小学校の先生に「学校に行くことよりも日本に行って、様々な体験をしていくことが大切です」と言われて来日を決めた、と高見小学校の生徒の前で話してくれました。



デニスは、2021年1月に102歳で天に召されるまで、毎年、震えるような筆跡で、イギリスから私達夫婦にクリスマスカードを送って下さいました。本当に愛情深い方で、弊宅に泊まりに来られた時には、私の夫の裕（ゆたか）と仲良くなり、帰る時には私と手をつないで、お話しされました。明るく、暖かく、まるで、父親のような方でした。いつかまた、デニスさんに会うためにイギリスに行きたいと思っていました。



今回、イギリス南部スインドンの恵子さんのお宅で、ストラウド（デニスが住んでいた町）という地名を聞いた時に、その地から弊宅へ来られたデニスたちと楽しく過ごした思い出がよみがえり、目頭が熱くなりました。



恵子さん達が日程を調整してくださり、デニズの家でお会いすることになりました。2023年7月3日、何と、ストラウドの家に、レオーニとその娘ルナ、母トレーシーさんが私に会うために来てくださったのです！ 看護師になり、母親になったリオーニ、デニスに目がそっくりの玄孫（やしゃご）のルナちゃんにお会いし、胸がいっぱいになりました。ルナは、言葉が達者で、おしゃまな女の子でした。日本から持って行ったお土産の木の車のおもちゃで、一緒に遊びました。



今回の旅行を通して、一緒に過ごしたお一人お一人の人生が尊く、輝いていること、時代や国を超えた愛が永遠に残ることを体験しました。

アガペ・ワールドの働きで、敵対していた国の人たちが、お互いに主イエスを愛する兄弟姉妹にされたことは、素晴らしい神様の御業です。私たちが、同じ時代を生き、主イエス・キリストにある神の家族として愛し合う新たな歴史を刻む者とされていることに感謝しています。

以上



< (左から) 私、デニズ、ルナちゃん、リオーニ >

2023年8月 藤田美代子

2023年夏、恵み深い神様のお導きにより、6名のアガペの皆様と共に22年ぶりに懐かしい英国を、訪れることになりました。

目的は、アガペワールドの活動をより深く理解し、協力するために、元捕虜・民間人抑留者の関係者の方々と直接お会いする機会を多く持ち、親交を深めるためでした。多くの関係者と接することができるように、日本大使館主催の和解のレセプションに参加できる時季を選びました。

恵子ホームズさんから伺ったところの、日本大使館が和解のためのレセプションを催してくださるようになった経緯を手短かに書き留めたいと思います。

アガペワールドの発足当初、元捕虜の方々と親睦会が、こじんまりと教会のホールなどを借りて行っていたのですが、1997年頃「大使館で開催してはいかがですか」というオファーをいただいて始まりました。

当初は、元捕虜本人とご家族だけの集まりでしたが、次第に他の日英の親睦のために活動しているグループも加わるようになりました。しかしながら、今も中心テーマは元捕虜関係者と日本との和解です。この催しは、大使館とアガペワールドによるコラボレーションです。レセプションに前後して、華やかな軍人クラブにおけるAfternoon Teaとお交わりの時、ミニ・パラダイスランチなど元捕虜関係者に会う機会が多くあり、懐かしい方々や初めてお会いする方々と和やかな時間を過ごしました。

特に初めてお会いしたJanet Bowlingさんから伺ったお話しが印象に残りました。彼女は、手のひらに載るほどの小さな聖書を見せてくれました。POWであったお父さんのその聖書は、出征する前にご両親（Janetさんにとっての祖父母）からプレゼントされたもので、戦争中も身に付けて持っていたとのこと。POWとして捕らえられて、すぐに、日本軍から、全ての持ち物を差し出すように言われ、それも燃やされることになったのです。しかし、一人の日本兵が、それをたき火の山から足で蹴り出して、そっと拾い上げてくれたので、燃やされずに済んだのです。

その聖書の裏表紙に書かれたお父さんの名前を見て、誰の物かがわかり、その日本兵が後日そっとお父さんに手渡してくれたそうです。その聖書の中の御言葉が、過酷な捕虜生活という暗闇の中の一筋の光になってJanetさんのお父さんを支えました。その聖書が、ご家族の信仰の継承の証しになっていると彼女は語ります。

POWの皆さんの辛かった捕虜生活の経験を聞くことが多い中、今回は、神様がそのような心ある日本兵をそこに置かれたご配慮を知り、ほっとした気持ちになりました。

その他、たくさんの感動的な出会い、再会がありました。

25年前に住んでいたReading, Berkshireの友人たちとも会うことができ、『いつくしみと恵みとが、私を追ってくるでしょう』という日々を実感しました。

ロンドンのJCF (Japanese Christian Fellowship) ハウスに、日本からの参加者が皆で泊めていただきました。色々な準備をしていただいた馬場さんご夫妻には大変お世話になりました。

恵子さんとダニエルにはSwindonの新居に泊めていただくための種々の準備に感謝しています。恵子さんの祈りの友である現地の素敵なご婦人方にもお会いでき、楽しい、楽しい時間でした。

日本から一緒に英国を旅した6人との美しいお交わりにも感謝しています。全ての恵みに感謝し、全ての栄光を主にお返しいたします。

以上